第十三回　小中学生「ふるさとの詩」入賞作品集　目次

◎　小学生の部（五十音順）

太田玉茗賞	ぼくの未来	渡邉　俊介	羽生北小学校	五年
宮澤章二賞	じいちゃんの手	岩﨑　朱里	三田ケ谷小学校	三年
優秀賞	ヤマバトのポッポ	大屋　瑠美	羽生南小学校	二年
	羽生の宝桑崎砂丘	金子　諒	岩瀬小学校	六年
	利根川と共に生きる	鈴木　琴子	手子林小学校	五年
奨励賞	大切な家族	小澤　陽馬	新郷第二小学校	四年
	つばめ	籠宮　月	三田ケ谷小学校	三年
	利根川をながめていたら	小泉　優	手子林小学校	五年
	見守り地ぞう	濱野　啓介	手子林小学校	五年
	野菜畑のかくれんぼ	山本　栞璃	須影小学校	四年
その他の良い作品				

◎　中学生の部（五十音順）

太田玉茗賞	曾祖父の願い	五十嵐　千翔	東中学校	一年
宮澤章二賞	野球グラウンド	田代　純也	西中学校	三年
優秀賞	私と利根川	小沼　奈生子	東中学校	三年
	ぼくの好きな場所	関根　快	南中学校	一年
	中学生になって　～自転車通学～	福島　尊翔	東中学校	一年
奨励賞	ふるさとでできた思い出	青鹿　理子	西中学校	三年
	「羽生城」	新井　友里愛	東中学校	二年
	家族の温もり	小林　杏海	東中学校	一年
	私のエネルギー	関根　綺星	東中学校	二年
	憧れの吹奏楽部	藤井　萌恵	南中学校	一年

その他の良い作品

◎小学生の部

太田玉茗賞

ぼくの未来

羽生北小学校　五年
渡邉　俊介

「四里の道は長かった。
その間には青縞の市の立つ町があった。」
これは『田舎教師』の書き出し。
ぼくはこの小説に出てくる町
「羽生」に生まれた。
羽生は藍染の町
藍染の特ちょうは
一つ一つの染め具合が違うということ。
色のこさも　模様も　にじみ方も
びみょうにちがってくる。
つまり藍で染めたものは
世界でたったひとつしかない
オンリーワンということ。

総合の時間の調べ学習で　藍染のことを
「ジャパンブルー」
と呼ぶことを初めて知った。
なんてすごいのだろう、日本を代表する色だ
なんて。
ぼくはびっくりしてほこらしかった。
サッカーの日本代表のユニホームも
東京スカイツリーのイルミネーションも
東京オリンピックのエンブレムも
「ジャパンブルー」
三年後の東京オリンピックでは
たくさんのジャパンブルーの旗が
日本中にはためいているに違いない

羽生で生まれた
ぼくの未来は
何色に染まっているのだろうか。
藍染のように世界で一つしかない色に
美しく染め上げたい。
藍の町、羽生
ぼくの未来はこのふるさと羽生から
世界に向かって広がっていく。

宮澤章二賞

じいちゃんの手

三田ケ谷小学校　三年
岩﨑　朱里

ぼくのじいちゃんは
いつも畑や田んぼにいる
野さいやお米を作っているからだ
トラクターを運転したり　くわを持ったり
だから　じいちゃんの手は
ゴツゴツ　ガサガサしている
ゆびが太くて　きずだらけだ
つめの中は　どろで真っ黒け
年中ばんそうこうがはってある
そんな　じいちゃんの手だけれど
時々　頭をなでられると
すごく　やさしく感じる
じいちゃんの手は　ふしぎだなあ

ぼくのじいちゃんちには
林みたいに　木がたくさんある
畑や田んぼにいない時
大きなはさみを持つことがある
大工さん
だから　じいちゃんの手は
日やけして　黒いシミやシワだらけ
めい路のような血管がいっぱい
つめは　タニシのふたみたい
年中　どこかがわれている
そんな　じいちゃんの手だけれど
ピアノをひくと
とても　きれいな音がする
じいちゃんの手は　ふしぎだなあ

優秀賞

ヤマバトのポッポ

羽生南小学校　二年
大屋　瑠美

「ポーポー、ポッポー」
今年もポッポがやってきた
いつものリズムでないている
たまにおんちのときもある
ごめんごめん、わらっちゃう

夏のまえにやってきて
ポッポの声で目がさめる
もっとねむっていたいのにな
ポッポは何時におきてるの

わたしのいえの花ミズキ
そこにポッポのすがあるよ
今年もこわさずそのままで
すの中入ってないている

ポッポがいるの少しだけ
学校からかえるといないんだ
ポッポも学校あるのかな
友だちたくさんいるのかな

あつくなるとポッポはこない
すずしいおうちがあるのかな
来年またね。まってるよ。
わたしはそのころ三年生

羽生の宝桑崎砂丘

岩瀬小学校　六年

金子　諒

平安時代から残る
桑崎砂丘
おじいちゃんが
子どものころよく遊んでいた神社
砂がいっぱい
砂丘は、山のように高かったそうだ
ぼくは歴史を勉強している
なんだか遠い昔が
すぐそばにある気がする
ずっと　ずっと　つながっているんだ
あの藤原氏の栄えていたころ
自然が残してくれた桑崎砂丘
中川低地の河畔砂丘の一部だそうだ
なんだか不思議
ぼくの近くで平安時代からの砂丘が
息づいているなんて
その砂丘の神社で、お父さんもお母さんも
ぼくも遊んでいた

そこは、埼玉県の指定になった
今、残していく大切な宝
桑崎の宝、羽生の宝が
ぼくの家のそばにある
ぼくの遊び場　桑崎三神社
大人になっても守っていかなければいけない
大切な宝
ぼくらの自まんの宝
こんな近くに自然と歴史が息づいている
不思議な世界

利根川と共に生きる

手子林小学校　五年
鈴木　琴子

いつも見慣れた流れの利根川
なにげなく見ている昭和橋からの風景
小さいころ土手で毎年しばすべりをした
とっても楽しかった思い出

利根川について最近学校で学んだ
徳川幕府が川をしめ切り流れを変えたこと
それにより洪水が減り
新しい田畑が増え、収入も増えたこと
先人達が長い年月をかけ築いてくれたもの
今の私達は、その恩恵を受けている

利根川は、たくさんの人の命の源
水は、私達が生きていく上で不可欠なもの
大切な水源としての役わりの川
だが反面、時には
大きな災害をもたらすものでもある

数年前、鬼怒川がはんらんし
大変な被害が出た
利根川がはんらんしたら
どうなってしまうのだろう
気になって洪水ハザードマップを見てみた
羽生市一帯が水びたしになってしまう
おそろしい
絶対に利根川がはんらんしないという
保証はない
どんな場所でも災害は起こりうる

「水は舟を載せ　又舟は覆す」という
故事成語がある
まさにその通りだ
私達に災害を防ぐ力は無いが
力を合わせて
被害を少なくすることはできると思う
昔から今へと大切にされ
守られてきた利根川
私達は川と共に生き、くらしている

奨励賞

大切な家族

新郷第二小学校　四年
小澤　陽馬

かべにぶつかる君
ちょっとしただんさに
おどろく君
ぜったい入らなかった
水たまりにも
入ってしまう君

その日はとつぜんおとずれた
サスケの目が見えていない

愛犬のサスケは
散歩が大好き
田んぼ道が大好き
道ばたの草が大好き

でも今、
サスケの目は見えていない
田んぼ道も　道ばたの草も
ぼくの顔も
サスケの目にはうつっていない

神様にいのり　仏様におねがいした
「サスケの目がなおりますように。」
星にねがい　月にいのった
「もう一度サスケの目にぼくがうつりますように。」
「サスケ、サスケ。」
ぼくの声で　ぼくをさがす
目は見えないけれど
耳でぼくを感じている
「サスケ、サスケ。」
いっしょに散歩に行こうね
落ちないように　ぶつからないように
ぼくがひっぱってあげるよ
「サスケ、サスケ。」
ぼくは、君の名前をよぶよ
君がぼくを感じられるように
君はぼくの　大切な家族だから

つばめ

三田ケ谷小学校　三年
籠宮　月

また、このきせつがやってきた。
毎年、この時期、期間げんていで、家ぞくがふえる。
つばめだ。
まずは、家作り。
小さな体で、何度も何度も土をはこぶ。
毎日、毎日、毎日。
夜は、できたばかりの家で、二ひきのつばめが、体をくっつけてねる。
一ぴきのつばめが、家からはなれなくなった。
わたしは、つばめの家をのぞきこんだ。
白くて、茶色いがらのはいった、小さなたまごが五つ。
もうすぐ、家ぞくがふえる。
「まだかな、まだかな。」
毎日、わたしは、つばめの家をながめる。
ある日。
つばめの家から、
「ピーピーピーピー。」
赤ちゃんが、生まれた。
小さな声は、日に日にふえた。
朝ごはんの時間。
お父さんと、お母さんが、ごはんをはこぶ。
「ピーピーピー。」
五ひきのひなが、大きな声で鳴く。
「いっぱい食べて、早く大きくなれ。」
わたしは、思った。
これが、期間げんていのわたしの家ぞく。

利根川をながめていたら

手子林小学校　五年
小泉　優

ゆったり、ゆらゆら
上流から下流へ流れていく
大きな川はば、たくさんの水
これからどこに運ばれ
だれのもとにとどくのだろう

川辺にあるたくさんの石
角がとれた丸い石
大きいのや小さいの
どこから来て、どんな町を通って
羽生の地に来たのだろう

キラキラ光が反しゃして
魚がおどっているように見える
私の心もおどりだす

川の流れを見ていると
なんだかとても気持ちいい

いやな気持ちをいっしょに
流してくれているのかな
たくさんの人の気持ちを乗せて
大きな海へと運んでいってくれる

利根川をながめていたら
なぜだろう
ありがとうと言いたくなった

見守り地ぞう

手子林小学校　五年
濱野　啓介

家の近くにお地ぞう様がある
ぼくにとって思い出のお地ぞう様

小さいころ、その通りを三輪車でよく散歩した
お母さんにおしてもらったり
一人でこいだりした
「お地ぞう様まで」が目印

自転車の練習もした
転んで泣いても毎日練習した
お地ぞう様がいつも見守ってくれていた

一人で自転車に乗れるようになって
お地ぞう様のずっと先までも
すいすい行けるようになった

弟もその通りで自転車の練習をした
ぼくがお地ぞう様までおしてあげた
「ここまでがんばれ」
ぼくがお地ぞう様でまって見守っていた
弟も、お地ぞう様のずっと先までも
すいすい行けるようになった

今ではもう
お地ぞう様は目印ではないはずなのに
通ると必ず立ち止まり
手を合わせている

お地ぞう様の少し先に
ひいおばあちゃんのおはかがある
おはかまいりに行く時も
お地ぞう様にも手を合わせる

お地ぞう様とひいおばあちゃん
どちらもぼくを見守ってくれている

野菜畑のかくれんぼ

須影小学校　四年
山本　栞璃

「いたいっ。」
いんげんに変身していたカマキリが
私の右手をひっかいた

畑のすみのブロックをどかすと
弟がそっとのぞきこむ
そこには大家族のダンゴムシ
いつからそこに住んでたの？

きゅうりの花のステージで
おしゃれなマントのコガネムシ
夏のおひさまにまけないくらい
かがやく宝石エメラルド

高い高いオクラの山
せっかち登山家てんとう虫
頂上の景色は楽しまず
次の山へと飛んでった

すばしっこいトカゲのランナー
ナスの林をかけぬける
弟と手分けしはさみうち
ブチッ　カサカサカサカサ
しっぽを残してにげてった

気づけば汗だくどろまみれ
さっきまでまぶしかった太陽が
やんわりとしたオレンジにかわった
台所からはカレーのにおい
お母さんへのおみやげは
まっ赤に育った大きなトマト
お風呂パシャパシャいい気持ち
水にうかんだトマトみたい

生き物さがしっておもしろい
生き物たちに感しゃして
私はふとんにかくれよう

その他の良い作品

作品は羽生市のホームページでご覧いただけます。

題	学校名・学年	氏名
ゆめのはかま	手子林小学校　四年	阿久津　一華
ツバメが教えてくれた	手子林小学校　六年	岩﨑　あゆな
しのぶえとわたし	新郷第二小学校　三年	荻原　麻衣
お獅子さま	羽生北小学校　六年	佐藤　航輝
ぼくのハルト	三田ケ谷小学校　二年	西野　嘉人
きゅうり	三田ケ谷小学校　二年	平野　遥基
新二小の風景	新郷第二小学校　五年	村田　心優
わたしの国	手子林小学校　六年	吉田　千紗
きなこぼたもち	新郷第二小学校　三年	吉野　倖生

◎中学生の部

太田玉茗賞

曾祖父の願い

東中学校　一年

五十嵐　千翔

八月十五日
今年もこの日がやってきた
終戦記念日
多くの犠牲者を出し、多くの人が深い悲しみに暮れた戦争だった。
私の曾祖父も戦場へ行き、心に深く傷を負った一人だ。
青春を戦争の為に捧げ、命がけで毎日を過ごしていた。
多くの戦友が命をおとしたそうだ。
もし、あの時、曾祖父が命をおとしていたら
間違いなく今の私はいないだろう
生前、曾祖父はいつも笑顔だった
その笑顔は、”平和“に対する喜びだったのかもしれない
米を作り、畑を耕し、一日一日を力強く、
精一杯生きていた
飢えと絶望の中、曾祖父はふるさとを思い
月を見上げて涙を流した日の事を教えてくれた
その時、私の心に中に、その情景が強烈に飛び込んできた
極限状態の中、曾祖父が命がけで生き抜いてくれた事に感謝せずにはいられない
曾祖父がつないでくれた、私の尊くて、大切な命
私は、胸を張って、精一杯生きていきたい
そして、世界中が平和で笑顔のあふれる国にしていきたい

宮澤章二賞

野球グラウンド

西中学校　三年

田代　純也

思い出す三年間の記憶
真夏の暑いマウンドに立った
ぼくはいつも感じる
自分が歩いた足跡
仲間の張り上げた声
ぼくから打つという相手の目
グラウンドの上で
チームメイトで汗を流したという自信が
ぼくを前へ前へと走らせる
ゴロをさばきファーストへ
土をまきあげているスライディング
審判の「アウト」の声
いつまでも忘れないだろう
このグラウンドにつまった思いと
三年間やったきた

チームメイトの笑顔
仲間と共に感じた友情
そして
毎日青かったあの空

優秀賞

私と利根川

東中学校　三年
小沼　奈生子

私の家のうらには
雄大な利根川が流れている。
私の成長のそばには
いつも利根川とのかかわりがあった。
幼稚園のころは
おじいちゃんと手をつないで
利根川を散歩していた。
小学生のころは
自転車で土手を走ったり花をつんだりして
遊んでいた。
中学生になった今、私は、
利根川が私の心をいやす存在となった
いやなことがあると
土手にのぼり利根川を見つめた。
こんなゆったりと流れる大きな川
でもこんなに大きな川になる前は、
小さな雨水。
少しずつ少しずつ大きくなっていったのだ。
利根川を見ていると
私のなやみはちっぽけに見える。
大きな川になるために山、土、石
いろいろな存在がある。
私もいろいろな人、物にかかわり
悩みも成長のかてにして
利根川のように大きな大きな
人間になれるよう成長していきたい。
利根川を見つめながら。

ぼくの好きな場所

南中学校　一年

関根　快

なんとなく　嬉しい日
なんとなく　心の沈んだ日
ちょっと遠まわりして
通りたくなる
近所の陸橋

小さい頃　祖父と一緒に
散歩した　陸橋

持久走の練習で
父と一緒に
坂道を走った　陸橋

登りきった　てっぺんで
見渡す　羽生の街

夕焼けの　やさしいオレンジ色に
つつまれて

遠くまで広がる　たくさんの家々
陸橋をくぐり抜け
まっすぐ　まっすぐ
走って行く　東武線

すべての色がやさしく
すべての音がやさしく

がんばれ！　がんばれ！
そう言ってくれている気がする

なんでもない日々だけど
一日一日が大切な毎日で

ぼくは　この街とともに
育って行く

やさしい街につつまれて

中学生になって　～自転車通学～

東中学校　一年

福島　尊翔

誕生日に新しい自転車がやってきた
中学生になるので、自転車通学のためだ
まぶしいくらいに光っている
早速、練習を開始
ちょっと大きめの自転車でペダルをこぐ
風をきって走る
中学校まで行ってみた
ある時は、カッパを着て練習してみた
荷物をのせてシュミレーション
準備は万端

四月八日・期待と不安の入学式
いきなり試練はやってきた
学校二日目、天気は雨
曲り角で縁石に触れて倒れた
荷物で重くなった自転車が起こせない
その時、三年生の先輩が足を止め
自転車を起こしてくれた

困っていた僕は嬉しかった

二度目、部活に行く途中
自転車と接触した僕は、田んぼに落ちた
先輩や友達が助けてくれた
三度目、停車中の車を避けるため
自転車を降りようとして
風にあおられて転倒した
丁度、後ろに止まった運転手さんが
わざわざ自転車を起こしてくれた

アクシデントの度に助けられた
助けてくれた人達に感謝
これからも、困難や試練があるに違いない
その度に、僕は乗り越えてみせる
冬は、北風に向かってペダルをこぐ
一年後には、太ももに筋肉がつくだろう
大きめの自転車は、ぴったりになるだろう
僕は、今日も元気にペダルをこぐ
希望をのせてペダルをこぐ

奨励賞

ふるさとでできた思い出

西中学校　三年
青鹿　理子

夏休みに入って、電車に揺られ
高校見学へ行くことが多くなった
あと八ヶ月もたてば、西中を卒業し
新たな道へ歩き出さなければならない
思い返すとたくさんの思い出が
映し出されてきた

約二年半、毎日のように走り回って
ボールを打ち続けた
地面に照りつける暑さの中
仲間と共に汗を流してきた時もあった
真冬の強風でこごえる寒さの中
たくさん自主練もしてきた
皆で笑って　皆で泣いた

教室に行けば本音で語れる友達がいる
苦しい時は話を聞いてくれたり
たわいもない話をしてきた
本気で打ちこんだ体育大会など
充実した毎日を送っている

登下校の時には声をかけてくれる
地域のおじいちゃん　おばあちゃんもいる
近所には「おかえり」と笑顔で
声をかけてくれる人もいる

この温かい羽生で育ってきて
ここがふるさとでよかったと思う

私の心のアルバムは溢れんばかりの
思い出で埋めつくされている
そして何年たっても増え続けていくだろう

私はこのふるさとを誇りに思う

「羽生城」

東中学校　二年
新井　友里愛

羽生に存した城
それは羽生城
三方を沼に囲まれた平城
どこにあったのだろうか
東谷天神社の敷地内に
「羽生城址」と書かれた碑と
「城橋」と書かれた碑だけ
なんと七〇年間の短い城史
それでも身近に城があったとは驚き
ただ一人の主人上杉謙信
城主は広田直繁と木戸忠朝兄弟
どんな城だったのか
みんな知っていたのだろうか
私は今まで知らなかった
周りを堀と土塁で囲み
かやぶき屋根の平屋
そんな簡素なものだったと
それでも形として残っていてほしかった

城のあったわが羽生
そんな歴史まだまだあるのかな
私の知らないいろいろな歴史
みんなにも伝えていきたい
そしてもっと羽生の歴史を知りたいな

家族の温もり

東中学校　一年

小林　杏海

「ただいまー。」
「おかえりー。」
私は家の鍵を持った事がない
いつも誰か待っていてくれるから
私の家族は五人家族
隣のおばあちゃんちは四人家族
大家族だ
登校する時、おじいちゃんが
「つっぺらねーように気を付けろー。」と
声を掛けてくれる
帰宅すると、おばあちゃんが
「おかえりー。早かったねー。」と
迎えてくれる
おじいちゃんが仕事から帰ると
「うんめぇーから、くってみろー。」と
おやつを買って来てくれる
疲れがとれるま法の言葉
おじいちゃんは、大工さん
毎日元気に働いている
私の部屋もおじいちゃんが増築してくれた
あこがれのロフト付き
壁紙もカーテンも電気も
全部自分で決めて
私のお気に入りの部屋
おじいちゃん、ありがとう
おじいちゃんと話していると
別世界にいるようだ
「おらがちに来やっせ。」
「雷様が来るから、はー、けーるべ。」
「骨折っかくなー。」
いつも一緒にいるから
何を言ってるのか分かるけど
みんなには分かるのかな
温かみのある羽生弁
おもしろくて
何だか気持ちがおだやかになる
ひまわりのようなおじいちゃん
ずっと笑顔でいてね

私のエネルギー

東中学校　二年

関根　綺星

私のエネルギーとはなんだろう？

それは、友達と過ごす楽しい時間
それは、家族揃って食べるおいしいごはん
それは、ギラギラと私たちを照らしつづけてくれる太陽
それは、目を閉じるときこえてくる虫の声
それは、緑あふれる羽生の町

それは・それは・それは…
数えきれないほどの
たくさんの人や物から
私はエネルギーをもらっている

そしていま私は
このふるさと羽生に
生きている
私のエネルギーが

どれか一つかけていたら
今こうして幸せに
生きていないかもしれない

だから
感謝の気持ちを込めて
精一杯
いまを生きていこう

憧れの吹奏楽部

南中学校　一年

藤井　萌恵

夏休みになると　近所の産業文化ホールで
吹奏楽コンクール地区予選が開催される
裏口にトラックが着き　器材が搬入され
制服の学生達がたくさん出入りする
小学生の頃は一人では近寄り難く
小さな弟と散歩をしながら様子を探っていた

中学生になり　私は吹奏楽部に入部した
初めて見る本物のクラリネット
初めて持つ本物のクラリネット
喜びと緊張で　思わず姿勢をまっすぐに正す
真剣な眼差しで楽器を奏でる先輩
練習後は笑顔になって　周りが和やかになる
そんなメリハリのある先輩は　私の憧れだ

三年生の先輩が最後になる大きなコンクール
その会場が産業文化ホール
去年までは遠くから見ていたあの景色に

今年は制服を着た私がいる
今まで積み上げてきた練習の日々が
私の脳裏のアルバムからめくられるように
次々とよみがえる
ホールに響き渡るそれぞれのパートの音色が
ひとつのハーモニーとなり　観客席に届く
各校の吹奏楽部がここに集まり
大きなホールで表現し合う
こんなに大きな感動を　いつも目にしている
この場所で味わえる嬉しさは　本当に格別だ
引退を迎えた先輩の意志を引継ぎ
私は来年も再来年も　この文化ホールで
最高の音色を奏でて行きたい
この決意は絶対に忘れない

弟と通りかかった文化ホール
今年はコンクールの課題曲を口ずさむ

その他の良い作品

作品は羽生市のホームページでご覧いただけます。

題	学校名・学年	氏名
ふるさとの言葉	東中学校　二年	新井　夏海
大きな木	東中学校　一年	池田　和佳奈
私が思うふるさと	東中学校　二年	大澤　神月
お母さんの梅干し	東中学校　三年	北林　己座
雨	東中学校　二年	関口　萌子
大切な想いはずっと心に	西中学校　三年	戸ヶ﨑　結優
夏の通学路	東中学校　一年	吉田　壱成